

## 『イエス伝』

2016年04月29日

『イエス伝』あるいは『イエスの生涯』という本は今までにどのくらい出されているのであろうか。イエスに魅せられた多くの人々が心を込めて著している。若松英輔氏の『イエス伝』を興味津々、一気に読んだ。若松氏は幼児洗礼を受け、子どもの頃、教会に通った思い出はあるが、聖書学者でも神学者でもなく、評論家である。豊かな感性と鋭い知性を持つ評論家が深い洞察で聖書を読み、多様な宗教、文化、人物と折衝しながら、生き生きとした『イエス伝』を描いている。イエスを知らされた幸いと嬉しさに満たされた。

帯には「信仰がなければ、真に聖書を読むことはできない、あるいは信仰がない者にはイエスは分からない、という意見がある。そうした声は、いつも信仰者の側から発せられる。果たしてそうだろうか。／聖書を読み、魂を震わせた人は、キリスト教信者の何倍も存在している」と書かれている。洗礼を受ければ「キリスト教徒」になるが、洗礼を受けなくても、イエスに捉えられ、心の支えにしている「キリスト者」は沢山いる。「イエスの生涯を記された福音書は、キリスト教徒のためだけにあるのではない。イエスがいつも、彼の目に『罪人』であり『異邦人』に映る者と共にあったように、彼のコトバもまた、それを必要とする者に開かれている」と、イエスの生涯と言葉は異教徒のためにも書かれていると言う。確かにその通りで、それが、聖書を永遠のベストセラーにしている理由である。

現代の聖書学は歴史学的、文献学的に驚くほど、進んできた。殊に「史的イエス」の研究はナザレのイエス像を浮き彫りにしてきた。そこから、学ぶことは多い。しかし、若松氏は「史実にあまりに重きを置き『科学』であることに満足した現代の学問は、事実の奥で現象している出来事と交わる術を見失った」と書いている。聖書は近代の合理主義に基づいて書かれたものではなく、理性的に読むことを拒まないが、それを超えている。若松氏は、イエスは神のコトバを具現化した生涯であったと読んでいる。コトバは言語だけではなく、根源的な意味を指している。その根源的な意味が彼方なる世界との交流を日常的に生きることへと導く。私たちは食べ物で肉体が支えられているように、コトバによって魂は養われている。イエスが弟子たちに示そうとしているのは、人間界における価値・無価値を定める座標軸から離脱し、思想の知解ではなく、存在する次元の転換である。狭義のキリスト教精神だけでは福音書を読み解くことができなくなっている。イエスの生涯を記した文字を真に読み解くには靈性の光が不可欠である。宗教とは本来、人間を自由に導くものでなければならない。イエスが生涯を賭して説いたのも真実の自由であった。この自由とは法的権利ではなく、超越への思慕である。そして、祈りは人間の魂の次元では沈黙を実現することであり、神のコトバを聞くことである。人間の熱意が、顕れようとする神のコトバを打ち消してしまう。祈りは神への願望を訴えることではなく、自己を掘り下げる営みでもなく、自己を他者に向かって開いていく営みであるという。

若松氏の『イエス伝』は上記のような視点で、誕生から復活までを、4つの福音書が互いに補完し合い、旧約聖書、パウロ書簡を引用しながら、更に、仏教、イスラム教、ヒンズー教と共振し、遠藤周作、シュヴァイツァー、ユングなどの言葉から、神のコトバであるイエス像を立体的に描き出している。それは、打ち萎れた罪人、異邦人を永遠の高みへといざない、魂の変容を与えてくれる。それが、他者に向かって開かれていく。

イエスの「わが神、我が神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という十字架上の言葉がイエスのコトバを福音として今日のように広めた。神への絶対的信頼と耐え難い苦悩の呻きは矛盾しない。このイエス理解に若松氏の心を見る。